

【レジュメ】

- ① 高橋順子（一九四四年千葉県生まれ）経歴と古里
- ② 初期詩集 繊細でさえわたる感性
詩想のスケッチ ひそかなユーモアと孤独 比喩
- ③ 車谷長吉との出会い
- ④ 文学をするもの同志の呼吸
- ⑤ 原稿を読み合うなかで鍛えられる言葉
己を拓く 詩境を開く 開かれた言葉
- ⑥ 東日本大震災に向き合う
- ⑦ 平明な表現と平板でない眼差し

【作品】

星の軋み

ガラス星のあいだをめぐる
星の軋み

星のひかりと
おのれひとつ
はげしい磁石

金のピアノ線が顫えている

オレンジとレモン

オレンジとレモンを抱えていた
オレンジとレモンは
大地のものだった
重たさがそのとき確かにわたしを救っていた

りんごのようなところ

こころの輪郭を素早くなぞったら
風となるだろうか
リンカクとよべるほど
固い質量をこころがもっているかどうか だ

鳥

記念写真のために 停止している人たちがいると
そこだけが 別の街になる

真白い鳥が

鳥の形だけ別の世界をはこぶように

そこでは鳥の形の額縁や

記念写真の形の額縁が売られている

鳥の目をした親子が

留守番している

朝まだきという名の鳥がまだ翔んでいたころのこと
だ

詩

詩なんて書かなくてもいい
と思うとそれが

小魚の骨のように喉にひっかかっている と思うと
わたしのほうが骨であって どこか

やわらかい喉に全身でひっかかっているように思え
てくる

どこかの地球のやわらかいのどを
腫らしているのではないかと

以上『風』一九八一年より

春 一

「寄せ植え」という名のついた鉢があった
土手に咲くひとむらの花や草 小石を移植したもの
だった

ナニカシルランみたいな片仮名の花と
同じくらい高い値段がついている

土には川藻がくっついていて
川藻は川に呼ばれていた そういえば
花屋さんの姿はさいぜんから見えなかった

町の角を曲って
それから 春の角を曲ってしまったらしい

『花まいらせず』一九八六年より

以上第一詩集『海まで』一九七七年より

木肌がすこしあたたかいとき

ー

地名をなくした野原
地上の灯りから離れたところで
わたしたちは夜の木になった
夜が夜の木に入ってくる時間がわかったよ

2

二人きりになりたいので
わたしはどんな一人になる
わたしからも一人になって
あなたとだけいるわたしになる
眼鏡を忘れてきたり
上着を忘れてきたり
足跡を忘れてきたり

3

茶色いセミの羽のようなのが
背中についていてくれればいい
背を向けなければならぬとき
ことばの代りに
それをふるわせるもの

4

街が近づいてきて
お近づきのしるしのように雨が降った
雨に流されたのは
殉教者風の恋人でした

5

秋になったら色を変える葉をつけて
冬には忘れられている木
でも木は忘れない
あらゆることを思い出している
木肌がすこしあたたかいときは
人間だったときに
うたえなかった うたを

『幸福な葉っぱ』一九九〇年より

あなたの部屋に

「あなたの部屋に行ってみてください」
と連れ合いになる男が言う
わたしの部屋はまだ空っぽの青畳 空っぽの
棚の上に
赤まんまどっさりの瓶
「神社の脇の土手で摘んだ」
似すぎているものをもっていることを
喜ばずに惧れた
知らなくてもいいものを

知ってしまうことがあるだろう そのときは
野の花がわたしたちを見ていてくれますように

処世術

「八百屋へ行くのに
鏡の前で帽子を三回かぶりなおすとは」
と呆れられている
「あなたには自分をよく見せようとする弱さがある
せめて嫌われてもいいと思つたら？」
一人で生きてきた臆病な女の処世術は
なるべく敵をつくらぬこと
なるべく人を悲しませないこと
黙っていること
でした いまそれが分かる

夕日が暈に

五月に連れ合いは心臓を病み
六月に胃潰瘍になった
七月から十一月まで慢性の下痢
本人もようやく疾患の心性を認めるにいたる
十二月再び心臓の痛みを訴える
ひとめぐりしたみたいだと言っている
何がひとめぐりしているのか
わからない主語
夕日が暈に長く差すころ
何のための円環か閉じようとしていた
そのときだ
狂気が男を襲ったのは

青い刺

「アロエのとげとげの葉が毒素をまき散らしている
ぼくはそれを全身に浴びる
家に帰るとまっさきにズボンを拭かなくてはならな
い」
男のおびえた目はどんな路地の奥の
干からびた暗い肉厚植物も見つける
わたしは苦しみとともに思い出す
はじめの日 アロエの青い刺をもって
このひとのところに来たことを
あのときのアロエの鉢は
雪の朝 氷柱花のようになって枯れてしまったが
わたしの青い刺は枯れなかったのだろう
(アロエは わたしではないの?)
訊かないでいる

まだかえらない

せんろ ひかっている
あすこにすわれば らくになれる
と かんがえてる じぶん きがついて
せんろぎわを はなれたという おとこ

まだ かえらない
いつも ざぶとんのうえに
あぐらを かいてるひとが
ひとりで にかけて
まだ かえらない
いまごろ どこに すわっているの
むしが ないてる

おとこがいない
あくたいつきの おとこが いない
あきの むしが ないてる
しんだ あきの むしが ないてる

以上『時の雨』一九九六年より

折り紙

折り紙のインコのくちばしは
おしゃべりをつとやめたときのかたちをしている
銀杏の小枝に止らせて
ひもを通したのを おばさんは窓ぎわに吊るした
風が入るとインコのぶらんこだ
「あれをつるしたらね」
とおばさんはわたしに言った
「小鳥が来たのよ」
みどり色の小鳥がベランダに来たそうだと
何でかなあ
とおばさんは考えている
いつのまにかインコのくちばしがひらいていて

海のことば

壁の上のほうに真っ直ぐな
黒い線が残っていて それは
波が来た跡だと弟が言う
部屋の中に黒い喫水線を
海は引いていった
弟の家族は黒い線の下のように布団を敷いて寝る
彼らが寝ている間

海は寝ないで海の音楽を
くり返している
くり返している

あ 風が出てきた
あ 楽器が壊れた すると
弟たちは寝汗をかく
海は魚や昆布をふとらせ
貝がらを舌でなめ

月のように光らせる やさしいこともするが
時折陸地をのぞきに行く
やさしいこと

やさしくないことは
海にとつては同じこと
おやすみ おやすみ
ずっとおやすみと

海は陸のいきものに言いふらし 言いふらし
もんどり打って帰ってくる
海の引く線は
透明であるべきだと
海は考える

しかし海は黒い線を引く

浪・鳥・魚

昨日のように 一昨日のように
浪は遠くで騒いでいた

鳥は遠くを飛んでいた

海へ下りていく石段で転んだのは誰

海から拒まれたのは誰

海のなかで

魚が笑っていた

魚を黙らせてください

大丈夫 じきに歩けるようになって

海まで行ける

海がそこにあれば

昨日のように 一昨日のように

鳥は遠くで騒いでいた

波は遠くを飛んでいた

鳥が笑っていた

波が笑っていた

鳥が襲ってきた

波が襲ってきた

海が来た

海にさらわれたのは誰

鳥を黙らせてください

海を黙らせてください

雨の魚

やがて海になる雨が降る
海の底に連れ去られたままの人たちを思いなさい
と雨足が強くなる
水に囲まれてきたね
目が見ているものが消え
手足が消え 耳が消え 鼻のあたりが消え
記憶が消え
しなやかな雨の魚になる

以上『海へ』二〇一四年より

見たことのない野原

濃緑と茶、黒と銀の毛糸をかぎ針にかけて
ひとりはり ひとりはり
編んでいます これ
モミの木の中にいますか
夜、遠くの島に返ってゆく波みたいですか
銀いろの糸は 雪に見えるかしら
星に見えるかしら
いいえ このセーターはむすめのものではありません
ん

わたしにむすめはいないから――
似合わないかもしれないけど

これは わたしに上げる
夜、^二時を過ぎると

手はひとりでにうごきだして
見たこともない野原が ひざの上にひろがってゆく
そこには ヒヨドリが カタツムリが トカゲが
ヌスビトハギが アレチノギクが あらわれるでし
よう

水面をぴんと張った沼と
番人の小屋も見えてきて
ひとりはり ひとりはり
遠いあなたが返ってくる

未知のわたし

自分のいるところが
自分からいちばん近いところだけれど
いちばん遠いところでもあるというのは事実である
地球一周航海でわたしは実感した
西へ西へと進んだ果てにわたしは元の港に帰り着い
た
わたしもわたしからいちばん近いヒトであると同時
に
いちばん遠いヒトなのではあるまいか
未知のわたしがいるから

まだ生きてゆける

愚かなうた

7

(さくらんぼをおそなえした)

さくら

さくらん

さくらんぼ

わたしはぼんくらで
さくらんした
さくらんぼした
どっちだっけ

さくらんした
さくらんぼ
さらまでくらいなさい
さくつ

鈴が鳴っている

リュックの中には遺影と
鈴が入っている
お杖は鈴の紐を切って柩に納めた
お遍路に出て四日目にあなたはわたしと
歩きに来た わたしの杖が
あなたのリズムで地面を叩き始めた
そんなに息せききってわき目もふらず
生きた人 (わたしのことは
とろい女だと思っていただろうな)
あなたの鈴が鳴っている
お四国の空と土に共鳴したのだね
枯れた川の上の潜水橋を
五位鷺の影がうつる堤沿いを
あなたと歩いた 歩いている
いま歩いている
鈴が鳴っている

踊り子草が回っている

鈴が

回っている

その中を

歩いてゆく

あなたと

世界と